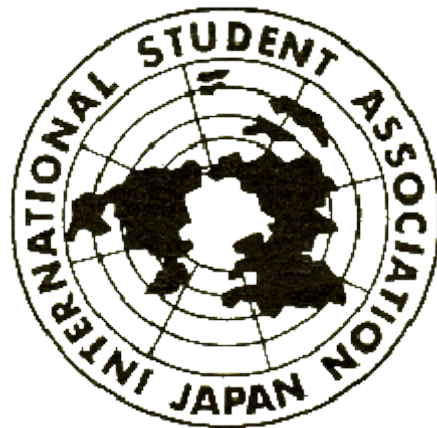


第1回国際協働プロジェクト

The 1st International Student Action Project
[ISAP01]



事業報告書



日本国際学生協会

International Student Association of Japan

目次

第1章 国際協働プロジェクト概要	
1-1 実行委員長挨拶	p02
1-2 実行目的	p03
第2章 第1回国際協働プロジェクト概要	
2-1 第1回国際協働プロジェクト概要、協力団体	p05
2-2 第1回国際協働プロジェクト日程	p06
2-3 実行委員、スタッフ名簿	p07
第3章 プロジェクト報告	
3-1 国内活動概要	p09
3-1-1 交換ノート(exchange gift)作成活動	p10
3-1-2 広報誌作成活動	p12
3-1-3 事前勉強会	p13
3-2 国外活動(Part 1)概要	p15
3-2-1 交流活動総括	p16
□ スポーツ交流活動	p17
□ 文化交流会、フェアウェルパーティー	p18
□ オープニングプレゼンテーション	p20
3-2-2 フィールドワーク総括	p21
□ スモーキーマウンテン訪問	p22
□ UCLA 訪問	p24
□ 学校・授業見学	p26
□ 先生との対談	p28
□ UP (University of the Philippines)訪問	p31
3-2-3 協働活動総括	p33
□ 環境保護意識向上活動	p34
□ 食育活動	p37
□ 歯磨き活動	p40
□ 衛生教育活動	p42
□ マングローブ植林活動	p44
3-3 国外活動(Part2)概要	p46
3-3-1 ヌエバエシハでの協働活動	p47

第4章 参加者の感想

- 4-1 ホームステイ感想 1 p50
- 4-2 ホームステイ感想 2 p51
- 4-3 第1回国際協働プロジェクト スタッフ感想 1 p52
- 4-4 第1回国際協働プロジェクト スタッフ感想 2 p53

第5章 全体総括

- 5-1 実行委員長総括 p55

第6章 第1回国際協働プロジェクト決算報告

- 6-1 国内活動、国外活動(Part 1) 決算報告 p57
- 6-2 国外活動(Part 2) 決算報告 p59

第 1 章

国際協働プロジェクト概要

実行委員長挨拶

実行目的

実行委員長挨拶

この国際協働プロジェクトを始めようと決意して、早や1年と3カ月がたとうとしています。決意したのは昨年2009年9月です。そして第1回目を終えて今思い起こすことは私達の活動に関わってくれた方々の笑顔や激励、そして叱咤です。私達学生はとても未熟です。様々な人々の支えなしには何一つ満足な活動を行う事はできなかったでしょう。私達のプロジェクトに関わり、支えてくれた皆様に感謝の意を表します。

常にプロジェクトの事を気にかけて、的確なアドバイスをくれた日高君、間瀬君、吉田君、田中さん。時にプロジェクトに対して疑問を呈し、そして私のわがままを受け入れてくれた日本国際学生協会の全国代表者会議のみんな。共に学生の限界を追求する荒川君、榮口君、由井さん。プロジェクト実行委員とは別の道を選びながらも、日々応援してくれた阪本さん。何度も何度も私の相談にのっていただいた日本国際学生協会OBの中嶋様さん。私達に様々な知恵とチャンスくれたゆきえさん、ジャンさん、LOOBメンバーのみんな。勉強会で遠くからも講演のために来てくれた前田氏。フィリピンでの生活を支えてくれたナムコン村のナナイ(Host-mother)、タタイ(Host-father)。未熟な私達の相談にいつものっていただき、大きなチャンスを与えていただいた西宮市参画・協働推進グループのみなさま。思いを形にし、われわれの提案を受け入れていただいた甲陵中学校教職員のみなさま。ヌエバエシハでの活動を快くサポートしていただいたアジア協会アジア友の会のみなさま。発足して間もなく、何を出来るかも分からないような私達の話に熱心に聞いていただいた、共立国際交流奨学財団の石塚様、YUSHA JATROPHA PLANTATION CORP.の長崎様。発足前から様々な形で、日々私達の活動を支えてくれる経済人コー円卓会議日本委員会の石田様。私達の活動の価値を信じ、相談にのっていただき、協賛していただいたみなさま。

第1回目は報告書の執筆が終わり、第2回目のメンバーに引き継ぐことにより完了を迎えます。とても小さな前進ですが、これまでの事を成せたのはこのプロジェクトに関心を持っていただいたみなさまのおかげです。心から感謝申し上げます。ありがとうございます。この報告書を読んでいただき私達の小さな前進を発見し、今後とも国際協働プロジェクトにご関心を持っていただければ幸いです。

最後に、リーダーとしてはあまりに不出来な私に最後までついてきてくれたプロジェクト実行委員・スタッフの皆と日々私を支えてくれる梨紗に感謝し、フィリピンでの私の生活や体調を日々気遣ってくれた私のナナイ・Myraのご逝去を悼み、心から哀悼の意を表します。

2010年12月

第1回国際協働プロジェクト (ISAP01) 実行委員長 佐藤 大和

実行目的

この国際協働プロジェクトは「世界平和達成への貢献」を理念に掲げ、その為に必要な活動を自分たちの力で作り上げ、自分たちの力で実行することを目的とした国際協力活動を行うものです。

日本国際学生協会は1934年に発足した団体です。そして、第2次世界大戦という悲惨な体験によって、当協会は世界平和の重要性への認識を得ました。「世界平和達成への貢献」という理念に基づいて行われる私達の活動は、既に75年の時を経ています。その中での活動の一環として、私達は2010年現在までに56回の国際学生会議を開催しています。この会議に参加した学生一人一人の心の中に「世界平和達成への貢献」という理念が確実に根付き、人類の相互理解への寄与は、大いに価値のあるものであると自負しています。しかしそれと同時に、私達は学生としての「行動」の重要性を痛感しています。56回それぞれの会議の中で感じたことや考えたことを、行動により実社会に還元しなければならないのです。つまり、世界平和達成へのより大きな貢献の為には、議論の枠を越え、平和へ向けたより主体性を伴った行動が必要不可欠なのです。

今までに足りなかったこの「行動」を推進していく本プロジェクトにおいて、私達は次の実行目的を掲げることとしました。

『自己の成長に伴う他者の成長への貢献』

「世界平和達成への貢献」という壮大な理念のもと、私達は全力で「学生に何ができるのか」という問いかけに立ち向かいます。この問いかけに対して、我々は成長を志向します。なぜなら、将来を担う私達学生が自らの手で課題を見つけ、解決策を模索し、実行に移していくことで得られる成長が、世界平和達成への大きな推進力になるということを、ISAの長い歴史の中で実感してきたからです。本プロジェクトを実践していく中で、私達の活動に関わる全ての人が、私達の活動から何らかのきっかけを得てさらに成長し、彼らからもらう刺激を糧に私達もさらに成長する。そうして相互成長を促進し影響の輪を広げていくことによって、世界平和達成への基礎を築いていくのです。私たち学生は今すぐ社会的に大きな影響を与えることはできませんが、10年後20年後を見据えた時、我々の活動が着実に社会の大きな財産となっていると信じます。

私達個人の成長がISAPという組織の成長に繋がり、それが他者への成長に繋がる。そうして学生一人一人の小さな力が世界平和達成への大きなうねりとなることを切に願います。そのための第一歩を、私達は踏み出したのです。

第 2 章

第 1 回国際協働プロジェクト概要

第 1 回国際協働プロジェクト概要、協力団体

第 1 回国際協働プロジェクト日程

実行委員、スタッフ名簿

第1回国際協働プロジェクト概要、協力団体

構 成	国内活動：西宮市立甲陵中学校・ISAP 協働企画「交換ノート作成活動」 「広報誌作成活動」 「事前勉強会」 国外活動：Part 1 「交流活動」・「フィールドワーク活動」・「協働活動」 Part 2 「フィールドワーク活動」・「交換ノート作成活動」
実 行 日	国内活動：2010年4月～12月 国外活動：2010年9月6日～12日 (Part 1) 9月13日～14日 (Part 2)
場 所	〔国外活動〕 フィリピン共和国パナイ島南部イロイロ州イロイロ市 (Part 1) ルソン島中部ヌエバエシハ州カバナツアン市 (Part 2)
ね ら い	〔国内活動〕 日本人学生（プロジェクト対象者）の国際交流経験の提供 国際的知識の養成と国際協力活動の促進 〔国外活動〕 相互理解の促進と友好関係の構築 問題への改善提案のための現状把握 フィリピン人との協働による問題改善
参加人数	22人
協力団体	NGO LOOB < http://www.loobinc.com/ > 兵庫県西宮市 参画・協働推進グループ < http://www.nishi.or.jp/ > 西宮市立 甲陵中学校 < http://kusunoki.nishi.or.jp/school/koryoj/ > 社団法人 アジア協会アジア友の会 < http://www.jafs.or.jp/ >

第1回国際協働プロジェクト日程

DATE	ACTIVITY	LOCATION
Part 1		
9月6日(月)	フィリピン・イロイロ市到着 朝食・フィリピン人キャンパーとのアイスブレイキング オープニングプレゼンテーション 文化交流活動 ホームステイ・夕食	マニラーイロイロ LOOB Base
9月7日(火)	学校教育活動 環境意識改善活動 歯磨き・食育活動、昼食 学校散策 学校授業見学 ナムコン村の子どもたちとのスポーツ交流 ホームステイ・夕食	ナムコン小学校 マンドリアオ小学校 ナムコン小学校 LOOB Base
9月8日(水)	学校教育活動 環境意識改善活動 歯磨き・食育活動、昼食 フィリピン大学生とのディスカッション ホームステイ・夕食	ナムコン小学校 マンドリアオ小学校 フィリピン大学Miag-go ナムコン村
9月9日(木)	学校教育活動 環境意識改善活動 歯磨き・食育活動、昼食 学校の先生とのインタビュー対談 ナムコン村の子どもたちとスポーツ交流 ホームステイ・夕食	ナムコン小学校 マンドリアオ小学校 ナムコン小学校 LOOB Base
9月10日(金)	ギマラス島 マングローブ植林活動	ギマラス島
9月11日(土)	衛生・英語教育活動 カラフナン・ダンプサイト見学 家庭訪問 ラーニングセンター・UCLA訪問 Farewell Party ホームステイ	カラフナン カラフナン・ダンプサイト ナムコン村
9月12日(日)	イロイロ出発 マニラ着	
Part 2		
9月13日(月)	マニラ出発 エバエシハ州着 市長訪問 交換ノート作成 文化紹介	市役所 カバナツアン中学校
9月14日(火)	文化紹介 井戸視察 市長訪問 エバエシハ州出発 マニラ着	カバナツアン中学校 GK村 市役所
9月15日(水)	マニラ出発 帰国	

実行委員、スタッフ名簿

<実行委員一覧>

※注 ISC：日本国際学生協会主催の国際学生会議の略称

役職	名前	大学・学年	備考
チーフ	佐藤 大和	神戸大学院 1年	元 ISC54 テーブルチーフ
総務部 部局長	沼 穂高	東京大学 3年	元 ISC55 総務部 部局長
部局員	長谷川 由樹	関西学院大学 2年	
プロジェクト企画部 部局長	奥野 友理子	神戸大学 3年	元 ISC55 総務部 部局長
国内活動責任者	菊山 文	神戸大学 3年	元 ISC55 テーブルチーフ
国外活動責任者	西谷 匡史	関西学院大学 3年	
部局員	池田 奈那	関西学院大学 2年	
部局員	横治 航太郎	関西学院大学 2年	
部局員	金子 真代	神戸大学 3年	元 ISC55 研修旅行部長
広報部 部局長	今井 智太	神戸大学 3年	ISC55 参加者
部局員	梅崎 智士	関西学院大学 2年	
部局員	宮崎 真彦	甲南大学 3年	
部局員	水谷 郁哉	甲南大学 2年	
財務部 部局長	玉井 謙吾	関西学院大学 2年	ISC55 参加者
部局員	石丸 菜美	神戸大学 4年	ISC53,56 参加者

<運営スタッフ一覧>

名前	大学・学年
河北梨紗	神戸大学 4年
小栗麻由	北九州市立大学 3年
河原弥生	北九州市立大学 3年
石倉誠人	神戸大学 1年
菅原彩織	神戸女学院大学 1年
原田道乃	甲南大学 1年
南井愛加	同志社大学 1年

第3章

プロジェクト報告

国内活動概要

交換ノート(exchange gif)作成活動

広報誌作成活動

事前勉強会

国外活動(Part 1)概要

交流活動総括

スポーツ交流活動、文化交流会、フェアウェルパーティー、オープニングプレゼンテーション

フィールドワーク総括

スモーキーマウンテン訪問、UCLA 訪問、学校・授業見学、先生との対談、UP 訪問

協働活動総括

環境保護意識向上活動、食育活動、歯磨き活動、衛生教育活動、マングローブ植林活動

国外活動(Part 2)概要

ヌエバエシハでの協働活動

3-1

国内活動概要

期 間	2010年4月～12月
場 所	兵庫県 神戸市・西宮市周辺
対 象	西宮市甲陵中学校の生徒 兵庫県 神戸市・西宮市周辺の居住者 ISAP 実行委員会・スタッフ
目 的	日本人学生（プロジェクト対象者）の国際交流経験の提供 国際的知識の養成と国際協力活動の促進
構 成	「交換ノート作成活動」・「広報誌作成活動」・「事前勉強会」
1. 交換ノート作成活動	甲陵中学校の子ども達とフィリピンの子ども達を、交換ノートによってつなぎ、両国の子ども達に新たな価値観を持ってもらうことにより、国際に対する興味や理解を育むため
2. 広報誌作成活動	神戸市・西宮市周辺の市民に対する、広報誌による国際的情報の伝達
3. 事前勉強会	国外活動の充実を図るための ISAP 実行委員・スタッフを対象とした事前勉強
協力団体	兵庫県西宮市 参画・協働推進グループ < http://www.nishi.or.jp/ > 西宮市立 甲陵中学校 < http://kusunoki.nishi.or.jp/school/koryoj/ >

交換ノート（exchange gift）作成活動

担当：金子 真代

1. 活動の目的・目標

フィリピンの中学生と兵庫県西宮市立甲陵中学校（以下甲陵中）の生徒、またフィリピンの小学生と日本の大学生との交換ノート（exchange gift；自身のプロフィールや普段の生活の様子を生徒自身が書いたもの）を通じて、甲陵中の生徒に、生徒自身が集めた資源によって作られた井戸の現状や井戸提供による現地の様子を知るとともに、交換ノートという形の交流を通して両国の学生の国際志向をさらに喚起し、異文化や異文化をもつ人を受容できる力を身につける。また ISAP としては、フィリピンの子供たちと日本の子供たちの国際交流の橋渡し役として、子供たちに日本とは異なる国、フィリピンをもっと身近に感じてもらい、国際協力への貢献とともに、一市民としての社会貢献を果たしたい。

2. 活動内容

【西宮市立甲陵中学校】

- アジア友の会を通じて井戸建設の支援活動を行っていた甲陵中の生徒に交換ノートの作成を依頼
- 作成後 ISAP メンバーがフィリピンの井戸のある中学校生徒へ渡す
- フィリピンで現地の生徒に交換ノートの作成を依頼
- 帰国後、甲陵中の全校集会や展示会で現地の様子や井戸の活用方法など写真や映像とともに報告

【日本大学生】

- フィリピンの小学生に一人一人、理想の世界について絵を描いてもらうよう依頼（協働活動、アニメーション教育のサマリーとして）
- 帰国後描いてもらった絵を日本の大学生に一枚一枚渡し、絵についての感想を記入するよう依頼
- その絵と記入してもらった絵をフィリピンの小学生に返却

3. 総括

交換ノートを通じた国際交流ということで、企画当初ははたして上手くいくのだろうか不安でしたが、国際ボランティアを長年続けていらっしゃる甲陵中を西宮市役所の方からご紹介いただいたことや、現地の学生が一生懸命に絵を描いたり文章に書いてくれたり、積極的な協力をしていただいたことで、日本とフィリピンの国境を越えた壮大な国際プロジェクトを実行することが出来ました。甲陵中の先生方、西宮市役所の方々、フィリピンの学生、このプロジェクトに関わった全ての人々に改めて深く感謝申し上げます。



広報誌作成活動

担当：今井 智太

1. 活動の目的・目標

国際協働プロジェクト発足当初より資金面での助成、および私達の活動を社会に発信することを目的に企業や財団など多くの他団体と交流を進めてきた。

しかしそれら活動を行っていく上で、『もっと地域の人にこの活動を知ってもらいたい』『もっと身近な存在に世界の現状をしって欲しい』と願うようになった。

そこで地域の人と私たちの橋渡し、そして私達の活動を通して世界を身近に感じ興味を持ってもらうことを目的に、我々にとってより身近な存在である広報誌の作成に至った。

さらに内容も海外料理店を中心に掲載することで、“食”を通して気軽に世界に身を触れさせることができ、またその他に先進国⇄発展途上国で行われるフェアトレードを扱うお店とその現状も同時に掲載することで、日本と世界の繋がりを感化させることを目標とした。

2. 活動内容

まず、広報誌の配布対象を私達と同じ大学生に特定し、神戸大学・関西学院大学・甲南大学の3大学近辺にある外国料理店を訪れ協賛を願いました。結果、計8店舗（内1つはフェアトレードを扱うお店）から協賛を頂くこととなりました。これらをもとに600部（各大学に200部）の広報誌を作成し大学内で学生に配布し、私達の活動への理解そして世界、特に発展途上国への関心を訴えました。

3. 総括

この活動を終えて第一に感じたのは“人とのつながり”でした。協賛して下さった店舗、協賛を頂けなかった店舗、そしてこの広報誌を手にとった学生達など本当に多岐にわたって多くの人と繋がりが生まれました。この繋がりを通して、多くも少なくも私達の活動ならび世界の現状を伝えることができた実感できました。この方々への感謝なくこの活動を終えることはできません。また真の目的とは異なりますが、私達自身の成長にも大きく寄与されたと思いました。学生である私達が数多くの社会人の方と面識を持ち、協賛をお願いするにあたっての礼儀・規則など様々な新鮮であり非常に有意義な経験を持つことができたのは、国際協働プロジェクトが掲げる目標にある『自己の成長に伴う他者の成長への貢献』に一步近づくことができたはずで

3-1-3

事前勉強会

担当：水谷 郁哉

1. 活動の目的・目標

<フィールドワーク>

実際に自分達の足を使いインタビューすることで、現地フィリピンでのフィールドワークを想定し本番のフィールドワーク活動に活かすこと。

<講演会>

現地フィリピン・ナムコン村の明確な情報を認知した上で、我々が作成したプログラム内容の見直しを計ること、また実際に現地で国際協力をされた方のお話を聞くことで国際協力について今一度考えること。

2. 活動内容

<フィールドワーク>

質問事項に対する仮説を立てた上で町に出て外国人にあるインタビューを行いました。自分達が立てた仮説と調査結果のギャップに対して、なぜそうなったのかの理由を考え、発表しました。

<講演会>

LOOB のボランティアスタッフだった方を講演としてお招きし、疑問に思っていることを質問することで、我々の中にある活動場所に対する漠然としたイメージを払拭しました。

3. 総括

➤ 日本人参加者の反応

自分の足を使い、異国の方に英語でインタビューすることは普段あまりできない貴重な経験であり、有意義であったと言ってもらえました。

➤ 実際にやってみて感じたこの企画の意義

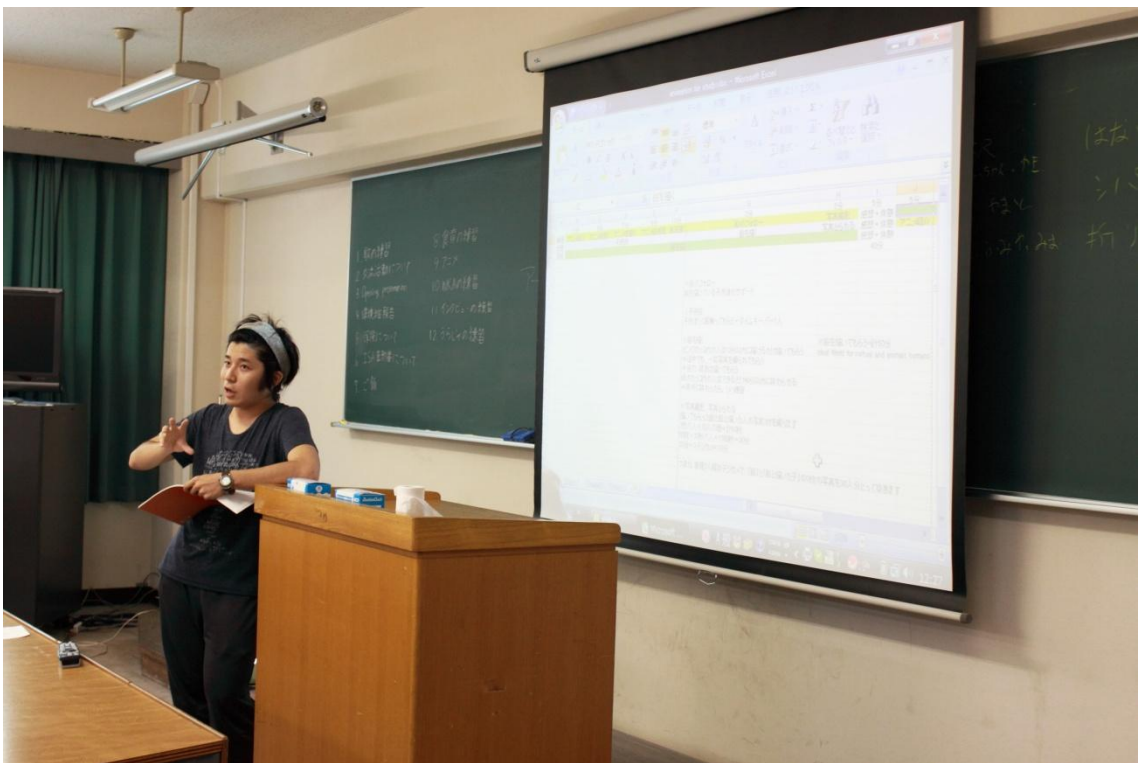
慣れない英語でも主体性を持ち、異国の人から情報を引き出したこと、実際に自分達の足を使い行動できたこと、つまり主体性を持って行動することがこの企画の意義だと感じました。

➤ 企画の改善点

もう少し時間が欲しかったこと、場所を神戸三宮全体ではなく、外国人が集まるようなイベント会場などで行うことができればよかったことだと考えます。

➤ 個人的な気づき

インタビューする際のオープニングクエスションに関してその国についての話題から入るとスムーズにインタビューすることができたので、フィリピンについての話題をできるだけ収集することが重要になってくると気付きました。



国外活動(Part 1)概要

期 間	2010年9月6日～12日
場 所	フィリピン共和国パナイ島南部のイロイロ州イロイロ市
対 象	ナムコン村・カラフナンに住む人々
目 的	相互理解の促進と友好関係の構築 問題の改善提案のための現状把握 フィリピン人との協働による問題改善
構 成	「交流活動」・「フィールドワーク活動」・「協働活動」
1. 交流活動	フィリピンの人々との信頼関係を築くため
2. フィールドワーク活動	フィリピンの現状を学び、今後の活動へ活かすため
3. 協働活動	フィリピン人との協働により、子ども達の成長に貢献するため
協力団体	NGO LOOB <http://www.loobinc.com/>

交流活動総括

担当：横治 航太郎

ISAP において「交流活動」は異なる分野であり重要視すべきではない。

こういった声が出発前の企画段階の時期にしばしば聞こえました。確かに ISAP の目指すところに交流活動は必要ないのかもしれませんが。しかし交流活動は ISAP にとって不可欠な活動であると私は確信を持って言うことができます。

ISAP (国際協働プロジェクト)、その名の通り私たち日本人メンバーは現地のフィリピン人スタッフやキャンパー¹たち、現地滞在の日本人スタッフたちと「協働」してこのプロジェクトを実行しました。またナムコン村の人たち、小学校、大学、UCLA 関係者など多くの人たちが私たちの活動に協力くださいました。

「交流活動」は私たち ISAP とフィリピンの方々との信頼関係を強めたいという考えのもと立案した活動です。どんなにいい活動をするにしても互いの信頼関係が希薄だとその活動は決して十分だとは言えません。信頼関係を強めることで互いの理解は深まり、活動にも協力的に携わることができるのです。「交流活動」という前提に、私たちが目指す「協働」という活動があると私は考えます。

今回実施した交流活動は 1. 文化交流会、2. スポーツ交流、3. フェアウェルパーティー、の 3 つがおもな活動です。文化交流会でオープニングプレゼンテーションとして互いの環境意識に関してプレゼンテーションを行いました。また、日本とフィリピンの地域に根付いた伝説についての紹介として、フィリピン側はナムコン村の伝説について劇を、私たちは桃太郎物語と関連する「うら」伝説の紹介として「うらじゃ」という踊りを披露しました。

スポーツ交流では 2 日間で日本の遊びとフィリピンの遊びを体験しました。私たちだけでなく、多くの子ども達も参加し非常に楽しい時間を過ごすことができると考えます。

三つ目のフェアウェルパーティーではホストファミリーも呼んで盛大なパーティーを催しました。料理を準備し、タペストリー制作、歌やダンスの出し物、ホストファミリーへのメッセージなど、大いに楽しみ、そして互いの別れを深く惜しみました。

交流活動を通じて今回協力していただいた多くの人との信頼関係は深まったと思います。この活動をきっかけに、日を追うごとに気楽に話すことができるようになり、相談し合い、協力し合うことへと繋がりました。そのことが慣れない地での、非常に数多くのプログラムをこなす ISAP を終えることができたことへの要因になったのではないかと考えます。

信頼関係を強め、互いに理解し合い、そして互いに協力し合うことで ISAP は成立します。交流活動はその第一段階にあり、ISAP の基盤となる重要な活動です。今後もこのような活動が継続して実行されることを期待します。

¹ ISAP の活動をサポートする現地フィリピン人青年

スポーツ交流活動

担当：宮崎 真彦

1. 活動目的

現地フィリピン人キャンパー、現地の子ども達との交流を深める為、簡単な遊びやスポーツを通して親睦を深めること。

2. 活動内容

二日間に分けて行いました。一日目は3グループに分かれて、大縄跳びや、だるまさんが転んだ、アイスブレイキングを行い、最後にみんなで日本の古典芸能の踊りである「うらじゃ」を踊りました。二日目は、**LOOB** ベースキャンプ近くの海岸で、フィリピンの遊びであるサンダル飛ばしをして交流を深めました。

この活動は、日本でフィリピンの子ども達と一緒に遊ぶことのできる日本の遊びや、フィリピンの遊びの調査から始まりました。活動本番では、フィリピン人キャンパーと子ども達と一緒にとても楽しむことができ、親睦を深めることができました。

3. 総括

フィリピン人に日本の遊びのルール説明を行うときに、英語で伝える難しさがありましたが、ボディランゲージや数をこなしていくうちに自然とみなルールが分かって進める事が出来たことには驚きました。実際にこの活動を行ったことで、フィリピン人キャンパーや子ども達とより一層絆を深められることができたので、とても有意義な活動であったと思います。



文化交流会、フェアウェル

担当：今井 智太

1. 活動の目的・目標

<文化交流会>

現地での活動を行う上でフィリピン人キャンパーの協力は不可欠な存在であり、日本時との意識のずれがあってはならないと考え、この最初の企画は現地で彼らとの交流を目的とした。

<フェアウェル>

1週間という長い期間、私達の活動を支えてくれた LOOB スタッフ・フィリピン人キャンパー・ホストファミリーの方への感謝を目的に、この最後の企画は彼らへの感謝の気持ちを伝えるための企画とした。これまでの活動を締めくくり、この先長い間も私達やその活動を心に残ることを目標にした。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

<文化交流会>

- ① チーフ挨拶
- ② アイスブレイキング
- ③ オープニングプレゼンテーション（別項にて詳細説明有り）
- ④ 文化紹介

<フェアウェル>

- ① 日本の伝統芸能『うらじゃ』・歌『また会える日まで』の披露
- ② ホストファミリーへの感謝の言葉
- ③ チーフ総括

➤ 現地での活動内容詳細

文化交流会では朝 5 時に空港に到着後すぐの活動で疲れがある中も、これから一週間の活動への期待や、仲間との出会いもあり、目を輝かせプログラムが進行されました。オープニングプレゼンテーションでは互いの環境意識を共有し、そのズレに感嘆すると同時にこれから始まる活動の有意義さを実感しました。

フェアウェルでは期間中支えてくれたすべての人々に感謝し、日本文化や合唱を披露し、全力で感謝を表現しました。そして最後にはホームステイ先の家族やフィリピン人キャンパーに向けてそれぞれが感謝の言葉を述べ、中には涙を流す者もいました。

3. 総括

“笑顔に始まり、涙で終わる”

この最初と最後に行われた2つの企画を見て、如何にこのプロジェクトが大変だったかを物語っているように感じました。初めは期待を持って臨んだものの、自分たちの考えの甘さから生まれた現実とのギャップ、そして体力的な疲れなど決して全てが円満に進んだわけではありませんでした。何度も自分の前に立ちはだかる大きな壁に落胆し、もどかしさを感じながら1週間を過ごしてきました。それでも最後のフェアウェルでは涙を流し、互いを感謝し合い、この活動を振り返ることができたことは皆にとって最高の経験であり、この活動の素晴らしさを感じることができた一時だったと思います。



オープニングプレゼンテーション

担当：西谷 匡史

1. 活動の目的・目標

Opening プレゼンテーションでは、日本とフィリピン両国の環境意識について取り上げ、お互いの環境意識の向上を図るとともに、新たな知識を得ることを目的とする。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

- ① イントロダクション
- ② プレゼンテーション（日本人・フィリピン人キャンパー）
- ③ プレゼンテーションに関連する問題についてのディスカッション
- ④ サマリー

➤ 日本での準備内容

- 日本の環境意識についてのリサーチ
- プレゼンテーション作成
- プレゼンテーションの練習
- ワークシート（日本人用・フィリピン人用）

➤ 活動内容詳細

この **opening** プレゼンテーションでは、日本とフィリピンで行われている政策及び問題を取り上げることで、互いの国の環境意識について知る機会を設けました。その後、お互いに相手国のプレゼンテーションで聞いたことに対して、ワークシートを用いて「何に興味をもったか」、「それはなぜか」などといったことを、事前に分けられたグループ内で共有しながらディスカッションを行いました。そして最後に、各グループ内でまとめた意見を全体で共有しました。



3. 総括

日本人・フィリピン人ボランティア共に、互いの国の環境問題とそれに対する政策について興味を持たれよう、1つのトピックを深く掘り下げて、ディスカッションできていたような印象を受けました。このプログラムを実施することは、環境意識についての見聞だけではなく、それ以外の同世代の若者の意見を聞くいい機会にもなっていたと思います。その反面、このプログラムの反省点として、到着後すぐだったためプレゼンテーションに集中できていない人が多かったと覚えています。そのため、もう少し実施時期を考慮すれば更に良い企画となったのではないかと考えます。

フィールドワーク総括

担当：奥野 友理子

フィールドワークの内容

- スモーキーマウンテン訪問
スモーキーマウンテンを訪れ、ウェストピッカー（ゴミ拾いで生計を立てている人）の家庭を訪問させてもらい、インタビューをさせてもらいました。
- UCLA 訪問
スモーキーマウンテンに住んでいる女の人たちが、生活力をつけるために作られた施設、UCLA を訪問し見学させてもらいました。そこでは拾ってきたジュースパックから鞆や財布などのジュースパック製品を作っていました。
- 授業、学校見学
ナムコン小学校で授業と校内の見学を行いました。加えて、マンドリアオ小学校で校内見学を行いました。
- 先生との対談
「環境」、「教育」、「経済」が子ども達へ与える影響を知るために、ナムコン小学校の先生方にインタビュー形式でお話を聞かせていただきました。
- フィリピン大学(UP)訪問
フィリピン大学を訪問し、その学校の大学生と「環境」、「教育」、「経済」のグループに分かれてディスカッションを行いました。

個人感想

フィールドワークでは、「フィリピンの学生や先生、そしてスモーキーマウンテンで働く方のお話を伺う」という貴重な体験を行うことができました。このように、多くの人から違った視点の考え方を聞いたことで、フィリピンへの理解が深まったと思います。

この活動に関わった全ての方に感謝しています。ありがとうございました。

スモーキーマウンテン訪問

担当：水谷 郁哉

1. 活動の目的・目標

フィールドワークでは知る、学ぶ（現状把握）ということが目的である。私達は実際に自分の足で現地に足を運び、そこでの状況を自分達で見て、肌で感じることの重要性を認識している。その中で、日本国内では知り得なかった、フィリピンのスモーキーマウンテン（ゴミ山）の情報知識を得て、そこから日本人とフィリピン人とのスモーキーマウンテンに対する認識の違いを知ることを目標とした。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

- スモーキーマウンテンを訪問し、現地の状況を知り、学び、把握する。
- スモーキーマウンテン近辺の家庭に訪問して、日本人とフィリピン人とのスモーキーマウンテンに対する認識の違いを知る。

➤ 日本での準備内容

私達は現地フィリピンの社会問題の一つにスモーキーマウンテンというごみ山の存在があると知りました。そのごみ山が人々に影響を与えていることなどをフィリピンに関する参考文献、インターネットなどを使い調べました。更に現地の人々に聞くための詳細な質問を考え、NGO LOOBの方々と共に質問内容を吟味し、当日の家庭訪問に備えました。

➤ 現地での活動内容詳細

現地フィリピンで社会問題となっているスモーキーマウンテンに行き、現地の状況、複雑な問題を把握します。そこから何がどのように問題であるのかを問題意識を持って、フィールドワークを行いました。また、実際にスモーキーマウンテン近辺で生活を送っている人達の家庭に訪問してもらい、現地の人々の家庭状況、日常生活の暮らしなどについてインタビューさせていただきました。ここではスモーキーマウンテン近辺で生活している人々のバックグラウンドを充分理解した上で、学生だからこそできる柔軟な質問をすることによって現地の人々の考えや意見を聞くことに集中しました。

3. 総括

➤ フィリピン人キャンパーの反応と日本人の反応

フィリピン人キャンパーは既に何度かスモーキーマウンテンを訪問しているので普段と変わらない様子でしたが、日本人はその場を取り囲む異臭、そこで暮らす人々の表情、ごみと泥が混じり合った本物のごみ山を前に重い緊張感があり、表情は真剣に

なっていました。

➤ 実際にやってみて感じたこの企画の意義

ある家庭を訪問した際に、学生がスモーキーマウンテンでできることは何かという質問をしました。家庭の人は子ども達に教育をして欲しいと答えました。その教育の内容というものは我々が知っている知識、経験を教えてほしいという意味のものでした。我々学生にもできることはあるということを実感し、知り・学んだことを次の行動に繋げることができるのがこの活動の意義だと考えます。

➤ 企画の改善点

今回は時間が短く、突然本題の質問にも入ることができず、最初は場を温めるような質問しかできませんでした。もう少し時間があつた方がお互いにとってもって有意義な時間を送ることができたと思います。

➤ 個人的な気づき

スモーキーマウンテン近辺に住む人々の家庭を訪問してのインタビューの結果、一日の収入は日本円で約 400 円²ということを知り、生活状況は厳しいことは理解できるが家にはテレビも DVD も生活用品もありました。どのような状況であっても、Pleasure というものは必要不可欠なものであると思いました。



²家庭より収入にバラつきがあり、イロイロ市のウェストピッカーの平均所得は 150 円ほどです。

UCLA 訪問

担当：長谷川 由樹

1. 活動の目的・目標

メディアなどで見聞きしている「フェアトレード」について、その全体像やフェアトレード商品の製作に従事している現地の人々の生活実態を知ることによって、今後の ISAP の活動を考えるきっかけとすること。

2. 活動内容

- ① UCLA 見学
- ② ジュースパック製品製作者にインタビュー
- ③ LOOB フェアトレード商品の視察

UCLA とは Uswag Calajunan Livelihood Association の頭文字で、Uswag・Calajunan 地域から集まった人々が、LOOB 支援の下で裁縫プログラムに参加するための場所です。このプログラムに参加する人々の家庭は主に、以前はゴミ拾いによって生計を立てていたウェストピッカーであり、裁縫をゴミ拾いに代わる彼らの生計手段にするために、LOOB が技術支援などを行いました。またここで生産されたフェアトレード商品はそのほとんどを LOOB が買い取り（製品は LOOB の注文を受けてから生産される）、フィリピンや日本などで販売しています。

この UCLA 訪問プログラムの準備として、日本において私たちはまず、コーヒー豆を事例にフェアトレード事業の歴史や世界での現状を勉強しました。また LOOB でボランティアスタッフを経験された方をお招きし、UCLA で作られる製品を実際に見ながら、UCLA と LOOB との関わりや今後の LOOB のフェアトレード事業の課題などをお聞きしました。

現地ではカラフナンのスモーキーマウンテン近くにある UCLA を見学しました。数人の女性がジュースパック製品を製作中で、従来からある大小様々のバッグ製品の他に、キーホルダーやサンダルなど、ジュースパックのかわいらしい柄を生かしたデザイン性の高い新商品を見ることができました。また作業中の女性にインタビューも行い、製品受注から製作までの流れや、裁縫プログラムによる生活の変化などについてお聞きしました。

3. 総括

UCLA の商品作りを生産する側から実際に見学し、インタビューすることによって、フェアトレードをより身近に感じることができました。LOOB のフェアトレード商品がどのような環境で、どのように作られているかを知ることによって、ISAP の活動で何ができるのかをより実感を伴って考えていくきっかけとなりました。今後はこのきっかけから、日本人の学生として何ができるのか、何か商品作りに役立つことはできないだろうかと考え、自分たちのできることを模索していきたいです。

また、UCLA では3台ほどのミシンがあり、そこに女性が3人いらっしゃって作業されていました。生地や作りかけの製品などは机一杯に広げられていました。UCLA で作られた商品は、企業からの発注があったりし、国内のデパートやスーパーで売られており、巨大なショッピングセンターであるモールに2週間ほど置かせていただくこともあるそうです。商品のデザインがよい、カラフルでかわいい、日本でも使いたい、と日本人参加者にはかなり好評で、多くの参加者がお土産や自分自身のために一人につきいくつも購入していました。とくに、ジュースパック製品は実用性が高く、また、現地のイロイロ市でもよく売れているそうです。インタビューで、UCLA ができたことによる変化についてお聞きしたところ、スモーカーマウンテンで製作の作業をしていた時は屋根がないため雨風がひどかったそうですが、屋根のある木造の UCLA で作業できるようになって、その状況が改善されたとのことでした。

個人的な気づきとしては、UCLA で作られたフェアトレード商品が、そのフィリピン国内でも売れているという点に注目しました。我々はフィリピンに対して外国として接する一方、フィリピンの国内でも、日比間関係に近いような格差があるのではないかと感じました。

私達の活動の反省点としては、時間があまりとれず、十分な質問ができなかったことです。この反省を来年度に生かし、フェアトレードへの学びを深めるとともに、そこで ISAP ができる学生による協働について考えていきたいです。



学校・授業見学

担当：石丸 菜美

1. 活動の目的・目標

ISAP01 のプロジェクト活動校であるナムコン小学校とマンドリアオ小学校の施設環境や教育活動を自分の目で確かめるとともに、フィリピンの教育環境について問題点、課題を発見すること。また、教師という教育のプロから授業運営について学ぶこと。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

<学校見学>

- ナムコン小学校、マンドリアオ小学校の学校施設を見学し、各校の施設環境やフィリピンの学校環境について観察する
- LOOB が各校で行っているプロジェクトを知る

<授業見学>

- グループに分かれ、授業を見学し、フィリピンの教育状況を観察する

➤ 現地での活動内容詳細

<学校見学>

マンドリアオ小学校では教室や体育館の他に食堂、LOOB が行っている学校菜園や、ボランティアによって建設されたトイレなどを見学しました。見学中にフィリピンの子ども達の健康状態やトイレ環境についての課題などについても聞かせていただきました。

<授業見学>

グループに分かれ、各教室で英語の授業に参加しました。

3. 総括

➤ フィリピン人の反応と日本人参加者の反応

日本人参加者はフィリピンの英語教育のレベルの高さに大変驚きました。アイスブレイキングや発音・会話中心の授業スタイルなど日本での英語教育との違いも多く、非常に興味深い時間となりました。また、生徒に関しては積極的に授業に取り組む子どもが多く見受けられました。しかし、積極的ではない、または学力がおもわしくない、子どもの集中力が切れてしまっている現状もありました。

➤ 実際にやってみて感じたこの企画の意義

学校教育を来年度以降も行っていくのであれば、現地の授業がどのように行われているのか知る機会が必要不可欠だと思いました。こういった授業ならばフィリピンの子ども達

が興味を持ってくれるのか知るヒントとなることに加え、教育のプロである教師の方々から授業の企画運営について学ぶことが多いと思われます。また、フィリピンの学校授業から日本が学ぶべきこともたくさんあると感じました。

➤ 企画の改善点

＜学校見学＞

学校見学は少人数のグループに分かれ、話が聞こえない、よく見えない等ということを防ぎたいと考えました。また一方的に見学するだけでなく、現状を知った上で、何が足りていないのか、何が必要なのかを質問し、私たちができることを考えたいと思いました。

＜授業見学＞

時間の関係で授業終了時まで見学することができなかったので、50分すべて見学できるようにしたいです。授業を見学したうえで感じた意見や疑問を先生に質問できる時間を設けるべきだと考えました。また、子どもにインタビューする時間が必要だと感じました。

➤ 個人的な気づき

自分たちが授業を行うだけでなく、授業を見学し生徒の立場に立つことも非常に有意義だと感じました。今回はそのような人は見受けられませんでした。あくまで授業中なので日本人と遊びたいと子ども達が視線を送ってきたりこちらに近づいたりしてきても相手をしない、授業に集中させる等といったけじめある場面が必要であると感じました。



先生との対談

担当：石丸 菜美

1. 活動の目的・目標

学生と教師の視点から、フィリピンの問題を考え、新しい情報を得る。ISAP01における活動校であるナムコン小学校の基本情報を知るとともに、教育、経済、環境各分野の視点を含めながら、ISAP02における活動、特に小学校での活動に生かすことのできる情報を得る。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

教育、経済、環境の3分野に関して、ナムコン小学校にて担任を務められている先生にインタビューを行う

➤ 日本での準備内容

- ・日本人各個人が考える先生への質問事項をまとめ、事前に質問リストを作成
- ・教育・経済・環境各分野の質問個数を設定
- ・担当者が質問を英訳し、全員でリストを共有

➤ 現地での活動内容詳細

日本人4人フィリピン人1人のグループを作り、ナムコン小学校で担任をされている先生方にインタビューを行いました。教育班からは、フィリピンの教育制度、学校設備や子ども達の就学状況等について、経済班からは、経済格差の影響、スモークーマウンテンの子ども達等について、環境班からは、環境教育活動等について質問をさせていただきました。また、学校に今必要な機材や設備が何かなど、来年度以降の活動にも生かすことのできる情報を教えていただいたり、教師としてのやりがいなど先生ご自身の経験やご意見を伺うこともできました。

3. 総括

➤ フィリピン人の反応と日本人参加者（コミ・スタッフを含む）の反応

日本人は質問文が急きょ変更になったことから少し不安があったように見えました。また、英語を聞きとってもらえないことも何度もあったことから少し悔しい想いをしたのではないかと思います。それでも真剣に言葉をぶつけると、先生からとても参考になる答えを頂き、日本人だけではわからない現場の問題点などを知ることができた為、先生のご返答に対して良いリアクションをとっていました。またフィリピン人は日本人とともにインタビ

ューを聞くというよりは通訳的存在として大きな力を果たしてくれました。

➤ 実際にやってみて感じた、この企画の意義

ISAP01では現地のニーズを掴むことができていない状態での教育活動や食育活動であったため、教育現場で実際に働いてらっしゃる先生方から今必要なものや子ども達の状況等を伺うことができたことで、「フィリピンの教育現場での問題点」を少しでも伺い知ることができました。01では現状把握の第一歩を踏むに止まってしまっていますが、この企画を継続的に行うことで、ISAPが行う教育活動に対するフィードバックを頂く機会ともなり得ますし、私たちが滞在していない期間において、フィリピンの教育事情がいかに変化しているか、また私たちISAPがいかに寄与できているかを知る機会となると思います。

➤ 企画の改善点

・現地到着後に質問リストの英訳の手直しが入り、それを当日朝に全員で共有することになってしまった。LOOB様側にも事前に英語添削などの準備をお願いしたいです。

・日本人参加者の英語レベルアップの必要性。フィリピン人がグループにいないかと思うようなインタビューができていなかったように思います。

→フィリピン人の先生へのインタビューのポイントとして、ゆっくり、大きく、ハキハキとの3点があげられる。先方もネイティブではない為、流暢さはいらぬ。むしろ以下に話す一語一語を理解してもらうのが重要です。

・当日追加で質問ができるように、教育活動を行ったり学校見学、授業見学をした時などに、もっと日本人が意識高く観察するよう心がけたいです。

➤ 個人的な気づき

・事前に質問を考えておく、当日見て感じたことを聞くと様々な意見がありましたが、事前に考えていって良かったと思いました。私たち自身にそれほどアドリブがきかず追加で聞いた質問はわずかでした。

・もし自分たちが授業を行った教室の先生にインタビューできているのであれば、私たちの活動についてのフィードバックをお願いしたいです。(今後はその教室担当者は必ず聞くようにするとか) →やりっぱなし、自分たちの中だけでのFBではなく、第3者、特に教師という教育現場でのプロの目線からISAPの活動について意見を頂きたい。

・日本人は自分自身の聞きたいことを聞くというよりは事前に用意してあった質問リストをこなすという少し積極性にかけるインタビューになってしまっていたように思います。それは急きょ質問文が変更したことや英語が伝わりにくかったことが相まっての結果と考えていますが、自分自身が感じたこと、疑問に思ったこと、聞きたいことを聞く時間にできれば良かった。



UP (University of the Philippines) 訪問

担当：玉井 謙吾

1. 活動の目的・目標

事前に日本で認識していたフィリピンの諸問題を主題としたディスカッションをフィリピンの大学生と行うことで、それらの問題に対する知識や見解を深め、日本人の大学生としての問題に対する関わり方を追及することを目的とし、そのディスカッションを通して、諸問題に対して私たちに何ができるかを具体化することを目標とした。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

UP キャンパスツアー、UP 大学生とディスカッション

➤ 日本での準備内容

環境、経済、教育の 3 グループごとにワークシートやガイドラインを作成、英語でのディスカッションの練習

➤ 現地での活動内容詳細

まず初めに、UP (University of the Philippines) の学生に大学のキャンパスを案内してもらいました。キャンパスは広大で、移動手段として自転車タクシーやジプニーが使われているようでした。寮や食堂、井戸を見学させてもらいました。

そしてディスカッションを行う場である校舎のロビーに移動しました。ディスカッションの前にアイスブレイキングとして、日本人とフィリピン人 (LOOB キャンパー、UP 学生) に分かれて一列になり 3 分間英語で自己紹介を行う、というのを 3 回繰り返しました。

それから環境、経済、教育の各グループに分かれてディスカッションを行いました。各グループでは様々な議論が展開されました。

最後に全員で集合写真を撮り、和やかに UP 訪問を終えました。

3. 総括

➤ フィリピン人の反応と日本人参加者の反応

フィリピン人はこちらの意図しようとしているディスカッションの方向性をなかなか理解できなかったようです。途中で方向修正も行うことになりました。日本人は英語を聞きとるのに必死で、フィリピン人が言った内容に対して反応するのは難しいようでした。

➤ 実際にやってみて感じた、この企画の意義

事前にはフィリピンの現地の学生だから、私たち日本人よりもフィリピンについて詳しくさまざまな未知の意見が聞けると期待していましたが、詳しいのは事実ですが大学生という恵まれた立場である時点で問題の当事者というわけではないので、必ずしも生の声というわけではないということを感じました。しかしながら、自国の問題に対する意見を強くもっているフィリピン人学生と接することで、日本人学生の勉強不足を感じることもでき、有意義な時間が過ごせたことは言うまでもありません。

➤ 企画の改善点

日本人学生の英語力をもっと向上させなければなりません。より有意義にするためにも日本人も意見を言えるように英語力を伴って深い問題に対する認識を持つべきだと思います。また時間がかかり制限されていたので、一部のキャンパスツアーを削ってもディスカッションの時間を延ばすようにすべきでした。また、事前に UP の学生にも情報を提供できればよかったです。



協働活動総括

担当：菊山 文

協働活動はフィリピンの人たちを対象に行う企画として、本番までに多くの時間と労力をかけて計画しました。何度も企画案を断念、検討し、みんなで意見をぶつけ合って本番に至りました。その道のりは国際協力に素人が多かった ISAP メンバーにはとても長かったけれども、その分実行したときの現地の人たちの笑顔や感謝の言葉に触れたときの喜びと私たちが現地で学んだことはとても大きかったです。

日本で企画をしていて一番頭を悩ませたことは、現地の様子が全く分からなかったことです。ISAP01 はゼロから自分たちで作らなければならなかったため、詳細な情報がないことで方向性を誤ることもしばしばありました。現地で活動したことがある人や国際協力の経験豊富な人がいなかったこともあり、まずはなぜ自分たちは学生という立場で国際協力をするのか、国際協力とは何か、などを自問自答するところから始め、自分たちにできる活動は何か、どのような活動が求められているのかなどを議論しました。しかし企画案は目に見える結果を得ることを一番に考えた案や現地のニーズに沿わないような案などが何度もあがり、専門家に話を聞きに行くなどして勉強したくさん議論をして、ようやく案が固まるまでに長い時間がかかりました。

本番までにあまり余裕がなく、本番を想定した練習が十分に行えなかったことは反省すべき点です。本番までのスケジュール管理が甘く、活動内容を決めるのが大きく遅れてしまいました。しかし本番は LOOB フィリピン人キャンパーが積極的に協力してくれて、なんとか全ての企画を最後まで終えることができました。現地ならではのアイスブレイキングで雰囲気作りや子ども達の誘導、現地の人たちとの交渉など、彼らの助けをたくさんいただきました。現地の人たちと信頼関係を築くのも、彼らのおかげでできたことです。協働活動はこうして多くの人たちの協力と助けをいただいて実行することができたことを強く感じます。そして活動できた暁に現地の人たちにもらったものは、私たちにとって計り知れないほど大きなものでした。日本とは違う人間性の温かい環境で、日本ではできない経験をたくさんさせてもらいました。

ISAP01 ではたくさんの協働活動を行い現地では慌ただしい毎日でしたが、3日間続けて行う活動は、3日目にもなると容量をつかみスムーズに進めることができるようになりました。今回は初めての活動ということで現地の人たちの反応を見ること、自分たちに足りない部分を見つけることも大切な目標でした。さらによりよい活動を目指して、今回の活動で得たこと、発見したことを次につなげていきたいです。

ISAP01 の協働活動を支えてくださった多くの方々に深く感謝をいたします。

環境保護意識向上活動

担当：梅崎 智士

1. 活動の目的・目標

<目的>

子ども達に、動物、自然の大切さを感じてもらった上で、何故ゴミのポイ捨てを行ってはいけないのかを伝え、それを理解してもらった上で、子ども達にとっての「自然、動物、そして人にとっての理想の世界」を絵に描いてもらうことにより、「環境」のことを考えてもらうこと。

<目標>

フィリピンでは、環境意識が非常に低く、道端にゴミを捨てる傾向がある。実際、今回活動させていただいたナムコン小学校でもゴミのポイ捨てにペナルティーを課すなど、ゴミのポイ捨てに強い関心を示していた。しかし、小学校ではあまり見られなかったゴミのポイ捨ても、一步学校外に出てみるとあちらこちらにゴミが捨てられている現状であった。実際、ナムコン小学校に通う子どもがいるナムコン村においても、子ども達がサリサリという売店で買ったお菓子の包み紙等を道端に捨てるといった行為が見受けられた。ゴミを自然にポイ捨てすることは、自然自体だけでなく、人間にすらも悪影響を与えかねない。故に、この活動を通して、子ども達自身に自分の身、そして、自分が住む環境を守れるようになってもらうこと。

2. 活動内容

➤ 活動内容

国外 - フィリピン

- ① ジブリアニメ平成狸合戦ポンポコ上映
- ② 紙芝居（ゴミのポイ捨てによる環境への影響について）
- ③ 絵を描く（自然、動物、そして人にとっての理想の世界について）

国内 - 日本

- ① 絵をポストカードにし、日本人のメッセージを添えフィリピンの子ども達に贈る

➤ 日本での準備内容

- ① ジブリアニメ平成狸合戦ポンポコ上映
プロジェクター3台、英語版平成狸合戦ポンポコ、及び必要な備品の確保。
- ② 紙芝居（ゴミのポイ捨てによる環境への影響について）
ゴミのポイ捨てによる環境への様々影響を調べ、その中で、ナムコン小学校で行

うに相応しい項目をピックアップし、子ども達に分かりやすく伝えるためにストーリー性を持たせた紙芝居を作成。その後は、紙芝居の登場人物の役割決め、及びその練習を行った。

③ 絵を描く（自然、動物、そして人にとっての理想の世界）

クレヨン、紙など、企画で必要な備品の確保。及び、子ども達が絵を描く時、参考となる、絵の作成。

④ 絵をポストカードにし、日本人のメッセージを添えフィリピンの子ども達に贈る
フィリピンで行われた 3 日目の活動後に、子ども達と子ども達が描いた絵の写真を撮り、それを日本に持ち帰り、ポストカードに印刷。そして、そのポストカードに日本人からのメッセージを添えた。

➤ 現地での活動内容詳細

まず、この環境保護意識向上活動はフィリピンで 3 日間、日本で 1 日間の活動で構成されています。まず、フィリピンにおける 1 日目と 2 日目前半の活動はジブリアニメ平成狸合戦ポンポコ放映です。これにより、子ども達に動物、自然の大切さを伝えました。

2 日目後半は、ゴミのポイ捨てによる環境への影響についての紙芝居を子ども達に見せ、子ども達に何故ゴミをポイ捨てしてはいけないのかを伝え、子ども達の環境への理解に努めました。

そして、3 日目は、以上の 1、2 日目の活動を踏まえたうえで、自然、動物そして人にとっての理想の世界をテーマに絵を描いてもらいました。これを行うことにより、子ども達にどのような世界が理想なのか？どうすれば人、動物そして自然が仲良くすることが出来るかなど、環境のことをより考えてもらうことにより、子ども達の環境保護意識の芽生えを促しました。

そして、帰国後このプログラムで抱いてもらった環境保護意識をより印象づけるために、子ども達に描いてもらった絵をポストカードにし、さらに日本人からのメッセージもそれに添えて贈りました。

3. 総括

1 日目と 2 日目前半のアニメ放映では、担当クラス以外のフィリピンの子ども達もアニメをのぞきに来ていたと言った状況、そして、実際にアニメを見ている子ども達の様子などから、このプログラムに対する子ども達の強い関心が見受けられました。

また、2 日目後半の紙芝居に関しても、紙芝居後に紙芝居について質問したところ、子ども達が何故ゴミをポイ捨てしてはいけないのかを理解してくれていました。実際に、紙芝居終了後、落ちていたゴミを拾う子どもも見受けられました。

そして、3日目の理想の環境を描いてもらうプログラムでは、子ども達が真剣に絵を描く姿から、子ども達が環境について真剣に考えていることがうかがえました。

また、帰国後における絵をポストカードにし、日本人のメッセージを添えてもらうプログラムでは、100枚近くの日本人にメッセージを書いていただき、称賛の言葉も沢山いただくことができました。以上のことから、このプログラムはフィリピンだけでなく日本にとっても良いプログラムであったと考えます。

今後の改善点としては、プログラムのもれを無くし、スムーズに行うために、複数の人のチェックを通し、チェックの回数も多くすべきであると考えます。次に、プログラムに対する子ども達の反応をもう少しうかがえるよう対策をするべきあると思いました。そして、これは個人的な気付きですが、「子ども」、「フィリピン人」、そして「ISAP」が「楽しめる」プログラムを行うことが何より重要であると感じました。



食育活動

担当：池田 奈那

1. 活動の目的・目標

このプログラムの目的は「子ども達が食品に対する正しい知識を持ち、日々の生活に活かせること」です。栄養の偏った栄養を摂取している子どもが多いという現状を知っている、現地協力団体の LOOB さんからの提案で行うこととなりました。

また、このプログラムの目標は、「子ども達にどの食品がどのような働きをするのかを覚えさせること」とし、評価基準を「子ども達が食品の働きを覚えたかどうか」に設定しました。

2. 活動内容

➤ 活動期間・場所・時間

- 2日間（1日目：9月8日 2日目：9月9日）
- マンドリアオ小学校
- 昼食時+昼休憩

➤ 活動内容要約

- 給食の配膳の手伝い（両日）
- 子ども達と共に食事（両日）
- 食品の働きを説明（1日目）
- 1日目の復習後、簡易な食品クイズ（2日目）

➤ 日本での準備内容

まず「食育とは何なのか」ということを考えました。私たちはより現地の子子ども達にとって身近で、教えた知識を活かせるということに重点を置き、歌やゲームを盛り込みながら、楽しく栄養について学んでもらうに工夫しました。また視覚的にも学べるよう、表に食品を、裏にその食品の役割を書いた画用紙を作成しました（図1）。

次に食品群ごと、また授業を構成するための導入やまとめといった部分の英語スクリプトを用意、チームに分かれて練習を重ね、現地での本番に備えました。

〔図1〕

表

野菜や果物のイラスト (3群の場合)

裏

To make better physical condition

➤ 現地での活動内容詳細

1日目は給食配膳の手伝い、全員が食べ終わってから栄養素を教える活動へと移りました。

あらかじめ黒板に 3 つに分けた栄養群のテキストを書き、日本で作成した画用紙も使用しながら行いました。しかし対象である子ども達はまだ英語をあまり理解できないため、私たちが英語での説明を終えた後、フィリピン人キャンパーに現地の言葉に訳してもらうという形で進めました。

2 日目は 1 日目同様給食終了後、まず昨日教えた内容の復習をするためにリズムを加えて 3 つの栄養群のテキストを子ども達と一緒に読み上げ、画用紙を見せながらその役割なども確認しました。その後完全に覚えられたかどうかを確認するために、私たちが様々な食品の名前をいい、その食品の属するグループの働きに応じてポーズをするという“ポージングゲーム (※1)”をしました。

(※1) ポージングゲーム…出題者が出した食品の該当する働きを考え、その動作をおこなうゲーム。魚・肉・卵等は体を作る働きがあるので“マッスルポーズ”、穀物や糖類はエネルギー源となるので“ジャンプ”、野菜や果物は体の調子を整えるので“ピースサイン”をします。

3. 総括

➤ フィリピン人の反応と日本人参加者の反応

全員楽しく取り組めていたと思います。子ども達も最終的には黒板のテキストをみれば全員ポージングゲームもできていました。しかし見ないでもできるようになった子どもいれば、できない子もいたので、完全に定着したとは言えないと考察します。

➤ 実際にやってみて感じた、この企画の意義

この企画をやってみて 1 番よかったなと感じることは、子ども達と楽しく「食」について学べたことではないかと考えます。最近日本で孤食、個食、中食が問題視されているなか、フィリピンの子供も達が栄養バランスの整っていない食生活といった、また日本とは違った問題を抱えていることも知りました。この企画は日本とフィリピン両国の食問題を考えられる新しい機会と気づきの場となったように思います。

➤ 企画の改善点

現地の子供も達の栄養素の理解度を高めるために、2 日ではなく、4 日ほどの時間を設け、自分でバランスの良い献立を考えることができるようになるまできちんと教え込むようには改善できないだろうか、と考えます。方向を変え、「栄養が足りないこと、偏っていることの身体に与える影響」を教えるのも良いのではないかと思います。

また LOOB との連絡共有を密なものにし、LOOB の教授方法と統合して栄養素を教えることができれば、よりよい定着を図ることのできる企画となったのではないのでしょうか。さらに当日のメニューをあらかじめ知っていると、日本でもその日に特化した練習やアクティビティを考えたりできたのではないかと思います。

ISAP の活動でありながら、LOOB と同じことを私たちが“体験させてもらう”という形になっていたので、次回からは LOOB との連携はもちろんのこと“ISAP の食育活動”というものを考え活動していきたいです。



歯磨き活動

担当：奥野 友理子

1. 活動の目的・目標

ISAP で関わる多くの子ども達が、歯磨きを行う習慣があまり無く、歯が次第に溶けてなくなってしまうといった現状があります。ゆえに、私達はマンドリア小学校の子ども達に、紙芝居を用いて、歯を磨くことの大切さを伝える事を目的とした活動を行いました。そして、歯ブラシを寄付し、実際に歯を楽しく磨くことにより、子ども達の歯の保護の喚起を促したいと考えました。

2. 活動内容

➤ 活動期間・場所・時間

- 9月7日～9日 昼食前後
- マンドリアオ小学校

➤ 歯磨き活動のはじまり

「虫歯持ちの子どもがたくさんいるフィリピンで、なんとか歯磨きの大切さを伝えたい。」チーフのそんな思いから生まれたのが、マンドリアオ小学校での歯磨き活動です。

フィリピンの子供達は、「サリサリ」という駄菓子屋さんのような場所で、お菓子をを買うのが大好きです。学校でも休み時間にサリサリに出向き、みんなお菓子やジュースを買って、食べています。しかしながら、歯磨きをしないため、虫歯持ちの子どもが非常に多いのです。ISAPの活動の下見をするために、フィリピンへ下見のため出かけたチーフは、その様子を見て、歯磨き活動の実施を決意しました。

➤ 現地での活動内容詳細

① 紙芝居を行う

ムシバーマンなどが登場する、楽しい紙芝居を ISAP のメンバーが日本で手作りし、子ども達に見てもらいました。

目的は「歯を磨かなければ虫歯になるので、歯を磨きましょう」ということを子ども達に伝えることです。

② 歯磨きの歌を歌う

歯の磨き方を説明した歌を替え歌で作り、全員で歌いました。

目的は「歯磨きって楽しい！」と子ども達に思ってもらうことです。フィリピンの人たちは、歌が大好きなので、すぐに覚えて、活動後もずっと歌ってくれていました。

③ 歯を磨く

ISAP のメンバーが日本で歯ブラシを集め、子ども達に持っていきました。その歯ブラ

シを使って、給食後に子ども達と歯磨きの歌を歌いながら一緒に歯を磨きました。目的は歯磨きを習慣づけることと、歌の時と同じく、「歯磨きって楽しい！」と子ども達に思ってもらうことです。習慣づけてもらうために、3日間の活動にしました。



衛生教育活動

担当：石倉 誠人

1. 活動の目的・目標

手の洗い方や、些細な怪我の対処法などの日常生活に必要な衛生に関する知識があまり定着していない子ども達に、その知識を伝え、覚えてもらうことを目的とした活動を行いました。

2. 活動内容

➤ 活動内容要約

カラフナンのごみ山近くに住む子ども達に、基本的な衛生に関する知識を伝え、定着させることを目的とした、楽しめる企画を行う。

➤ 日本での準備内容

子ども達にどのような知識が必要とされているかを調べ、考えること。その結果に沿った企画の作成。

➤ 現地での活動内容詳細

カラフナンのごみ山近くに住む子ども達に集会場に集ってもらい、衛生に関する知識を楽しく学べるような企画を2種類行ないました。

1つ目の企画は、手洗いダンスです。手の洗い方の学習、及び手洗いの習慣化を目指して、音楽に合わせて手を洗うダンスを子ども達全員と楽しく踊りました。

2つ目の企画は、怪我の対処法クイズです。日常で起こりうる怪我をしたときにどのように対処すればよいかを、選択形式にしてクイズを行ないました。

3. 総括

➤ フィリピン人キャンパーの反応と日本人参加者の反応

まず、子ども達と英語で意思疎通を行うことが難しいことが多かったため、企画の説明等においてはかなりの面で現地語を話せるフィリピン人キャンパーに頼る形になってしまいました。それでも日本人参加者はボディランゲージなどを駆使して、子ども達と楽しくコミュニケーションをとっていました。

➤ 実際にやってみて感じたこの企画の意義

最後に **Review** を行った際に、子ども達が嬉しそうにクイズの答えを答えてくれたことから、私たちの企画を通して楽しく学んでくれたことを知り、とてもうれしく思いました。

➤ 個人的な気づき

子ども達は知識を学びはしたものの、それを実践に移してもらえるかと言うと、疑問が残りました。より実感が伴うような企画づくりや、継続的な活動が必要であると思いました。



マングローブ植林活動

担当：菊山 文

1. 活動の目的・目標

マングローブ植林活動を行った理由は、事前勉強の際に現在フィリピンで活発に行われている活動だと知り、体を動かして活動できる企画として強くやりたいと思ったからです。マングローブの生態を知り、全てのマングローブを ISAP と LOOB のキャンパーが協力してスムーズに植林することを目標に行いました。

2. 活動内容

ネグロス島で半日間、マングローブの植林を行いました。

この活動の担当者がメンバー全員の知識向上のために、日本での事前勉強会でマングローブ植林に向けてのプレゼンテーションを行いました。なぜ私たちはフィリピン・ネグロス島でマングローブ植林を行うのか、マングローブが伐採された背景や植林活動が活発化している理由、マングローブとはどのような植物で環境にどのような影響を与えるのかなど、自分たちが活動する意義を明確にしました。

3. 総括

マングローブの植林は思っていたよりもハードなものでした。植林場所に到着するのが予定よりも遅れてしまったためにすでに満ち汐になり始めており、海面が人の首まで来るようなところで植林を行わなければなりません。最初は植林に慣れていない上に水中に潜って植えなければならなかったのが、なかなか作業が進みませんでした。次第にそのような状況だからこそフィリピン人キャンパーと協力的に行うようになり、珍しい体験に夢中になって行っていました。そして彼らとこの活動を通して一層親睦を深めることができました。

マングローブの苗木の植え方や植える環境を知り、成長したマングローブを初めて間近で見られて、フィリピンの豊かな自然がマングローブを育てていることを実感しました。ネグロス島にはそのままの豊かな自然があります。そうした自然に囲まれて一日を過ごすことは日本人の私たちにとってはとても新鮮で気持ちがよく、誰もが明るくエネルギーにあふれた表情になっていました。自然をむやみやたらに破壊してしまったら再び元の状態に戻すためには大きな労力と時間が要ること、そして美しい自然があることがとてもかけがえのない素晴らしいことだということを、今回実際に自分たちでマングローブを植林してみて強く感じました。

反省点は、準備に ISAP キャンパーがもたついてしまったために、満ち汐の前に植林を開始することができなかった点です。植林のための時間が減ったことはもちろん、海面が高いことに最初若干怖気づいてしまい、作業に慣れるまでに時間がかかってしまいました。

そのため、LOOB に用意していただいたマングローブの苗木を全て植え終えることができませんでした。慣れないことではあるけれどもてきぱきと行動すること、また事前にある程度水につかって植林することを、写真などを見て心構えしておくことでもっとスムーズに進めることができたかと思います。



国外活動(Part 2)概要

期 間	2010年9月13日～14日
場 所	フィリピン共和国パナイ島南部のヌエバエシハ州カバナツアン市
対 象	カビアオ・ハイスクールの生徒
目 的	国際的知識の養成と相互理解の促進 カビアオ・ハイスクール訪問による現状把握
構 成	「フィールドワーク活動」・「交換ノート作成活動」
1. フィールドワーク活動	西宮市甲陵中学校がフィリピンの学校へ寄付している、井戸の現状を視察し、甲陵中学校の子ども達へ報告するため
2. 交換ノート作成活動	甲陵中学校の子ども達とフィリピンの子ども達を、交換ノートによってつなぎ、両国の子ども達に新たな価値観を持ってもらうことにより、国際に対する興味や理解を育むため
協力団体	社団法人 アジア協会アジア友の会 < http://www.jafs.or.jp/ >

3-3-1

ヌエバエシハでの協働活動

担当：金子 真代

1. 活動の目的・目標

フィリピンの学生と甲陵中学校の生徒との交換ノート（exchange gift；自身のプロフィールや普段の生活の様子を生徒自身が書いたもの）を通じて、甲陵中の生徒に、集めた資源によって作られた井戸の現状や井戸提供による現地の様子を知るとともに、交換ノートという形の交流を通して両国の学生の国際志向をさらに喚起し、異文化や異文化をもつ人を受容できる力を身につける。また ISAP としては、フィリピンの子供達と日本の子供達の国際交流の橋渡し役として、子供達に日本とは異なる国、フィリピンをもっと身近に感じてもらい、国際協力への貢献とともに、一市民としての社会貢献を果たしたい。

甲陵中学校ではすでに資源回収を生徒主体で行うユニセフ委員会が設置されており、国際志向の教育環境が整えられた学校である。しかし、生徒たちは資源を回収する段階まではよく知っているが、それらの資源が換金されて、井戸が建設されて、実際に井戸がどのように使われているのかまでは知り得ていない。そこで、ISAP が実際に現地の建設された井戸まで行き、井戸建設後の井戸の現状や現地の人々の暮らしぶりを、現地の人々の顔が見える形で報告する。そこで、生徒たちが資源を回収して、甲陵中の生徒にとって顔が見えるボランティアを実践できれば、生徒の資源回収への意欲を更に向上させ、自分たちが行っていることの素晴らしさに気づくことができる。今回の活動を通して現地の生の状況や影響を知ってもらうことは重要であると考えます。

2. 活動内容

- フィリピン ルソン島ヌエバエシハ州カバナトゥアン カビアオ町カビアオ国立高校における交流活動
 - ―交換ノートの作成
 - ―甲陵中学校生徒が作成した交換ノートの進呈
- カビアオ国立高校、および周辺の子供達の生活に関する調査活動
- 調査活動報告書の作成

本プロジェクトは、一方的になりがちな国際協力活動にとどまらず、現地の子供達や青年と共に協働する双方向性を持った活動である。人と人との強固なつながりをベースとした活動であるため、継続的な活動となり得る。また、参加型の活動を行うことで子供達の自発的な国際相互理解を促すことが可能となる。

3. 総括

甲陵中が関わった井戸を見てくるという課題を持ってフィリピン・ヌエバエシハに行くという機会を与えていただいた、甲陵中の生徒・先生方、紹介していただいた西宮市役所の方々、フィリピンで車の手配などしていただいた社団法人アジア友の会の方々、深くお礼申し上げます。現地では、カビアオハイスクールの熱烈な歓迎をしていただきました。また、井戸がどれほど重要な役割を果たしているのか、実際に目で見て感じる事が出来、水に恵まれている日本人の一人として深く考えさせられました。このような貴重な機会を提供していただき、誠にありがとうございました。



第 4 章

参加者の感想

ホームステイ感想 1

ホームステイ感想 2

第 1 回国際協働プロジェクト スタッフ感想 1

第 1 回国際協働プロジェクト スタッフ感想 2

ホームステイ感想 1

担当：原田 道乃

このフィリピンでのホームステイは私にとって初めてのホームステイでした。ISAPでの宿泊方法がホームステイだと初めて知ったとき、とてもわくわくもし、不安にも思いました。日本の都会暮らしに慣れた私に、フィリピンでちゃんと生活できるのかと…。

フィリピンに行く上で食事のこと、生活全般のこと、健康のこと、言葉やコミュニケーションのこと、不安なことはたくさんありました。でも、ホームステイ先でこれらについて困ったことはほとんどありませんでした。ナナイ（現地語で“お母さん”）が作ってくれるご飯はどれも本当においしかったです。それは他のホームステイ先も同じなようで、みんな「うちのホームステイ先のご飯はおいしい」と話していました。ご飯が食べられないと、体力的にもつらくなってしまいます。だから、ホームステイ先のご飯がおいしかったことは本当によかったなと思います。

お風呂は“大きなバケツに溜まった水を桶ですくい、流す”というスタイルです。初めはそのスタイルに慣れなくて苦労しました。でも、3日目くらいからはだんだんうまくなったような気がします。また、洗濯は全て手洗いです。大きなたるに水をため、洗剤を入れ、一つ一つごしごしと洗っていきます。確かに、大変ではありましたが、いい経験だったと思います。日本ではなかなか経験できないことを経験できて、楽しくもありました。普段、日本で当たり前のように使っているシャワーや洗濯機に感謝することもできました。

日中のハードスケジュールで疲れてはいましたが、ホームステイ先に帰って、ホストファミリーや近所の子ども達と過ごした時間が私を癒してくれたと思います。夜は子ども達とトランプをしました。お互いに英語は得意ではありませんでしたが、一生懸命にルールを教え合ったりしました。ちょっとしたことでもお腹を抱えて笑いあいました。その時間は本当に楽しくて、素直に「あ～、幸せだな」と思いました。

毎日、ホームステイ先に帰るとホッとできました。ホームステイ先は私にとって“一日の疲れを癒してくれる”場所でした。穏やかで暖かいフィリピンの家族。私がISAPでの8日間を無事に過ごせたのもホストファミリーのおかげです。本当に感謝しています。このホームステイで感じた便利な生活への感謝の気持ち、そして穏やかで暖かい気持ちを日本でも忘れずにいたいなと思います。

ホームステイ感想 2

担当：石倉 誠人

まずなによりも伝えたいことは、ホームステイがとても素晴らしいものであったということです。ホストファミリーの皆様は私たちを常に気にかけてくださり、快適に過ごせるよう様々な面で工夫してくださいました。この点に関しては、感謝しても感謝しきれません。また、私たちとの交流をととても大切にしてください、できる限り長い時間をともに過ごせるよう、配慮してくださいました。夜は毎晩夕食後にお酒を酌み交わしながらのんびりと歓談し、その日の思い出から個人的な話題まで、様々な話をしました。

ホームステイのよいところは、なにより心と心が触れ合える点であると思います。私はこのホームステイを通して、ホストファミリーの方々の暖かい心に触れることができました。これは言葉では説明できないほど嬉しくて、幸せなことです。このホームステイの思い出は、私にとって永遠に忘れることのできない宝物です。



第1回国際協働プロジェクト スタッフ感想 1

担当：河北 梨紗

ISAP は本当に、自分の成長を通じて他人に貢献できるプログラムでした。来年も参加できたら、また新たな発見を得られることと思います。

ISAP では、フィリピンの子ども達が何を必要としているか考え、日本人・フィリピン人スタッフとミーティングを重ね、現地で実行することが求められます。その過程では、相手の立場にたつこと、広い視野をもつこと、自分の考えをしっかりと相手に伝えること、そしてチームワークを活かすことの重要性を改めて実感しました。それが出来るか出来ないかで結果が大きく左右されるのです。私たちは試行錯誤を繰り返しながらも、環境保護意識向上活動、歯磨き活動、食育活動等を通じて子ども達の笑顔・成長を見ることができ、嬉しい限りでした。

しかし ISAP は第一回目の開催であり、まだ一過性のものにすぎません。第一回目に出会った子ども達を含め、さらに多くの子ども達と私たちが次回以降も共に成長し続けねばなりません。先進国・途上国という枠組みを超えた、共に学び、共に発展できる国際協力。よりよい世界を形づくるために、私たちはこのような国際協力を継続的に行っていきます。



第1回国際協働プロジェクト スタッフ感想2

担当：菅原 彩織

今年度 ISAP01 は国際協働を掲げ、日本で議論をするだけでなく実際に行動することから、自己成長のみならず他者の成長へ貢献することが大きな目的でした。

私が特に印象に残っている活動は、環境保護意識向上活動です。環境保護意識向上活動は現地の小学校に訪問して行いました。ナムコン小学校にて、ジブリ映画のぼんぼこを小学生に見てもらい、自然と動物と人間の共存の様子を描いてもらいました。英語が完璧に理解できていない子どもも、映画自体はとても楽しんでもらえたようでした。実際に絵を描き始めると、生徒たちの顔は真剣で、一人一人がとても丁寧に描いていたのを覚えています。

実際に今回スタッフとして参加して思ったことは、とにかくハードだったけれど、普通ではなかなか経験できないことばかりだったと思います。ただ、今回行った活動の中には、歯磨きのように継続性が必要なものもいくつかありましたが、私たちが日本に帰ってきた後の状態が気になります。ですので、ISAP02、03と続いていくことで、成果のできるもののかなと思いました。ISAP02へ向けて、改善のための課題が多く見つかった01だったと思います。



第 5 章

全体総括

実行委員長総括

実行委員長総括

10日間の国外活動本番を終え、今私はISAPメンバーとしては一人フィリピンのイロイロ市に残り、LOOBメンバーとしてISAPで関わった子ども達と共に日々を過ごしています。そこで、子ども達やフィリピンの文化を深く観察し思うことは、私達の活動は意義あるもので必要だったのであろうかという疑問です。個々人によってその結論はきっと違うでしょう。ISAP運営者・スタッフとしての立場、外部からISAPを評価する立場、ISAPをサポートする立場など、様々な立場によって見方が違うためです。そして、その中での私の結論は、学生という立場から見れば「意義ある活動」であり「今後も継続して活動を行っていくべき」であるということです。

日々フィリピンでの時を過ごしながら分かることが、小さくともそこにはISAPの足跡があるということです。子ども達は私達の授業の事をよく覚えていますし、ホームステイ先の父さん母さんは時にISAPメンバーの事を口にし、また、いつも私の事を気遣ってくれます。この小さな足跡は、私達が日本国際学生協会の長い伝統から1歩踏み出したからこそついたものであり、掲げる理念に近づくものです。赤ん坊が初めての1歩を踏み出した時の感動のごとく、私は過去の足踏み伝統からのこの小さな1歩に大きな意義を感じます。

一方、学生という視点から離れると、そこには深い現実を知らずに行動した結果としての失敗と反省ばかりが目についてきます。それは私達にとっての成長となりました。報告書に記載の通り私達の活動には更なる学びと改善の余地があり、同じくして、関わった子ども達に更に学んでほしいこともたくさんあります。ISAPには大きな伸び代と課題があり、子ども達にもISAPを通じて得ることがある、この事実こそが、私達の掲げる「協働」を続けていく必要性を訴えかけています。

学生は、実践（協働）はさておき大人しく学びの基礎を追求すればよい。そういった反論があるかもしれませんが。傲慢にも他人より1歩踏み出したために失敗し、諺にある通り、出る杭は打たれるのも事実です。しかし、打たれるからこそ根は深くなり、杭は太く大きくなると私は考えます。「出すぎた杭は打ちようがない」。たくさん打たれた杭は最後には人を支える大きな柱になるのではないのでしょうか。10年後、私達が30代に入るときにISAPで関わった子ども達が成人し社会へ出ます。その時の彼らに少しでもよい影響を与えるためにも、今、学生の時に打たれ成長する機会は非常に貴重であると考えます。

今後ISAPは第1回目の反省を踏まえ、更なる躍進を遂げ、関わるすべての人々にとって大きな学びと成長の機会となっていくでしょう。

2010年12月

第1回国際協働プロジェクト（ISAP01）実行委員長 佐藤 大和

第 6 章

第 1 回国際協働プロジェクト決算報告

国内活動、国外活動(Part 1) 決算報告

国外活動(Part 2) 決算報告

国内活動、国外活動(Part 1) 決算報告

支出内訳

1.本番運営費		(単位:円)
国外活動(Part 1)運営費		
滞在費	現地交通費、宿泊費、食費 22人分	1,100,000
交流活動費	CD1枚	1,350
	日本食紹介	2,475
	タペストリー制作	1,390
授業活動費	DVD 1,980円×3枚	6,340
	文房具	7,239
植林活動費	軍手	596
団体保険		2,660
小計		1,122,050
国内活動運営費		
参加者勉強会費		
交通費		182,030
ポストカード交換活動		6,373
講演会謝礼金		2,580
小計		190,983
2.実行委員会運営費		
交通費		70,000
発送費		969
銀行手数料		105
その他チーフ特別活動費		
交通費		42,160
小計		113,234

3.広報活動費

広報誌作成費		29,600
報告書作成費		
宣伝費		3,044
小計		

4.その他

次年度繰越金		
小計		

総計	1,554,667
----	-----------

収入内訳

(単位:円)

自己資金		1,470,000
OBOG 支援金		39,667
広報誌収入		35,000
その他支援金		10,000
小計		1,554,667

総計	1,554,667
----	-----------

国外活動(Part 2) 決算報告

支出内訳

(単位:円)

国外活動運営費		
車両借り上げ費	13,050 円 × 2 台 × 2 日	52,200
運転手代	6525 円 × 3 人 × 2 日	39,150
現地活動場所使用料		26,970
宿泊費	14 人分	30,717
謝礼費		20,000
小計		169,037

総計	169,037
----	---------

収入内訳

(単位:円)

自己資金	69,037
西宮市助成金	100,000
小計	169,037

総計	169,037
----	---------

第1回国際協働プロジェクト (ISAP) 事業報告書

発行責任者：佐藤 大和 (第1回国際協働プロジェクト 実行委員長)
編集責任者：今井 智太 (第1回国際協働プロジェクト 広報部 部長)
発行元：日本国際学生協会 国際協働プロジェクト

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原1番町1-155
関西学院大学文化総部 ISA
